



京都嵯峨芸術大学・宇野和幸ゼミのステップスギャラリー、二度目のグループ展である。宇野以外メンバーは一新し、ゼミと言っても中道由貴子（1985年～）、吉井愛（1986年～）、長沢優希（1989年～/京都造形芸術大学大学院）の三者は卒業生であり、作家として活動している。

フライヤに宇野が掲げた開催趣旨を引用する。「...「社会」とは次元を異にした価値観や既存の体系では説明不能な意識の根に突き動かされた視点による、世界を構築しようとする営みこそが芸術の社会性と呼ぶべきものだろう。創造することの自明性への不断の問いかけがそこにはあるはずだ。芸術の力はそこにこそある。「社会」を中断した地層から描き出される、正しさとは異なった手触りや、数値化できない実体への受容、曖昧さの能動的な生成。それらをして創造と呼ぼう。それはまた豊饒な実りへと志向された肥沃なる断絶ともいうべきものを伴っている。あなたはそれらが肥沃なる中断を意味することを知る。」宇野は社会の価値観と異なる創造と社会との断絶を宣言する。

今回、宇野は和紙にミクストメディアの小品を16点、中道はパネルに綿布、アクリルの中型平面と小型平面を2点ずつ計4点、吉井は油彩の円形と小品を3点ずつ計6点、長沢は可変の新聞紙の作品を4点、展示した。

ここではグループ展としての総体を描く。様々な素材が混合し、色や形と言った視覚的な視線よりも、触覚と言った感触を想起しながら作品群に触れ合うと、その魅力が増していく。作品の中へ入って、作品に包まれる想像力を駆逐すべきだ。味覚といった感触を喚起させてもいい。

するとその総てを甘受する方法論が、改めて現代美術に必要な要素であることに気が付く筈だ。現実に戻ると、社会に目を向けると、社会に生きることとは社会を構築することであることを意識できる。社会の中に芸術があるのではなく、芸術の中に社会があるのだ。その断絶を回復する必要性を更に意識して制作し、立ち向かい、考察するのが、我々が今日に生きる役割なのではないだろうか。

